


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

この不寛容な時代に — ヒトラー「わが闘争」を読む —

佐藤 優 著 ・ 新潮社

ISBN978-4-10-475216-4

1,500 円 + 税

ヒトラーの「わが闘争」は、世界を変えた書と言っていい。

しかし、今、私たち(少なくとも私)は、この書を読んでみようとしないう。また、難解で、読みこなせないだろう。(「難解さ」については、本書を読んでいくうちに、著者(佐藤氏)によって解説されていく。)

だが、本書(「この不寛容な時代に」)によって、佐藤氏の手ほどきを経て、「わが闘争」を通読することができる。

随分かみ砕いて、比喻や事例を挙げながら解説してくれるのだが、私には、理解不能の個所もたくさんある。しかし、それでいて、ぐいぐい引き込まれて読み進めてしまう。不思議な魅力に満ちた本「この不寛容な時代に」である。

本書は、「新潮講座」での佐藤氏の講義を再構成したものだという。参会者とのやり取りも採録されているが、ハイレベルな問答で、私などは、立ち往生してしまうだろう。(参加しなくてよかった。)

さて、今、なぜ、ヒトラーの「わが闘争」なのか。著者は、「まえがき」の中で、次のように述べる。

今回の新型コロナウイルスは大きな脅威となっている。このような状況で、アドルフ・ヒトラーの「わが闘争」から批判的に学ぶことには大きな意味がある。ヒトラーによるナチズムは、客観性、実証性を無視した神話によって国民を束ねるところにその特徴があるからだ。その際に必ず起きるのが、司法権、立法権に対する行政権の優位だ。

……(中略)……

ヒトラーは、第一次世界大戦後、不安定になった国民心理をデマゴギーによって巧みに操って権力を奪取した。新型コロナウイルスによる危機を利用して、権力を掌握する独裁者型の政治家が台頭する可能性を軽視してはならない。その意味で、「わが闘争」の負の遺産から批判的に学ぶべき事柄が少なからずある。

(まえがき)

まず、ウンベルト・エーコ(イタリアの評論家・美学者 1932 年～ 2016 年)の「不寛容」をめぐる論文、エッセイから読み解く。今、リベラルもネットウヨも関係なく「不寛容」になっている、と著者は読み解く。

私が驚愕したのは、第三章「性も健康も国家が管理する」のうち、「不治者の断種」の項である。「わが闘争」の中の一文。

欠陥のある人間が、他の同じように欠陥のある子孫を生殖することを不可能にしてしまおうという要求は、もっとも明晰な理性の要求であり、その要求が計画的に遂行されるならば、それこそ、人類のもっとも人間的な行為を意味する。

(本書 p.132)

この後、佐藤氏の講義が続く。

……(前略)……

精神障害者も殺してしまったほうがいい。無慈悲なようだが、それが全体にとっては極めて人道的なのだ。こういう考え方は、相模原の障害者施設「津久井やまゆり園」での大量殺傷事件にすぐ繋がっていきますね。合理性や生産ということだけで考えていくと、ここへ行きつく可能性がある。そんな思想が既にここで芽生えている。これは生命観の問題です。

(p.133)

たくさんの示唆に富む、きわめて重厚な本であるが、私が注目したもう一つの事項について触れよう。それは、第五章「総統の逆問題」のうち、「中間共同体の重要性」の項である。著者によれば、

グローバル資本主義にもファシズムにも抗するためには「中間共同体」の再建が重要だ。

(p.208)

という。そして、今の日本では、

例えば連合傘下の労働組合なんかはもうボロボロになって、ほとんど中間団体として機能していない。

(p.209)

と述べる。

日教組も日高組も以前のような影響力はなくなった。社会のいろんな面において、一人一人がばらばらになって、中間団体的なものに結集できていませんよね。

(p.209)

と指摘する。

ここの論考は、大変興味深い。中間団体を維持するのは掟(おきて)である、と指摘する。(法とは別の規範である。)

中間団体は、独自の互助システムを持っているが、それが壊れているというわけである。今の教職員組合について考えるのに一石を投じられた感がある。

難解な個所もあるが、今の時代を見つめる好著である。ぜひ挑戦していただきたい。

今月の一冊 (令和3年4月号 第166号)